

# 特別活動としての縦割りホームルーム制の理念の再検討

## —若狭高等学校の事例分析—

的場正美\*

### 1 本研究の目的と分析方法

#### 1-1 研究対象

小中学校及び高等学校において学級運営や授業づくりの基礎には学級づくりがある。学級は、明治期の一斉授業において学習指導をするために意図的に編成された教授組織である。だが一方で「日本の学級は同時に、生徒指導を展開するうえでの基礎単位という成果をも担っている。この性格を自覚的に追求する実践」(久田 2009、107) が学級づくりと捉えられている。この学級づくりに大きく作用するのは現代の教育活動領域においては、特別活動の中でも小中学校においては学級活動、高等学校においてはホームルーム活動である。本研究は、特別活動の中でも高等学校におけるホームルーム活動、特に、福井県立若狭高等学校の縦割りのホームルーム制を分析の対象としたい。

#### 1-2 研究目的

1948(昭和23)年に小浜高校として発足し、翌年に若狭高校と名称を改称し、その年に若狭高等学校は、縦割りのホームルーム制を導入し、実施してきた。幾度の論議が重ねられ、1994(平成6)年3月この縦割りのホームルーム制は廃止になった。戦後において民主的で平和な社会をめざしていた日本においてこのホームルーム制はどのような人間像を目指していたのであろうか。その人間像は、これまでの日本における現在の特別活動に対応する教育活動と比較してどのような特徴があるのだろうか。本研究は、現在の特別活動と呼ばれる明治期以来の教育活動において形成される人間像との対比を通して、福井県立若狭高等学校の縦割りホームルーム制はどのような人間像を目指しているのか、その人間像を明らかにすることを目的とする。

#### 1-3 分析方法

縦割りホームルーム制に関する分析方法について、荻谷剛彦は論文「問題の設定：縦割りホームルーム制とは何であったのか」の中で<アプローチ>として、次の3つのアプローチを挙げている。

第1は教育哲学的なアプローチである。そのアプローチは「縦割りホームルーム制の背景にある教育理念や理想について吟味したり、そうした理念を教育理論との関係で論じるアプローチ」(荻谷 1997、387)である。

第2は、教育実践的アプローチと言える。荻谷はこのアプローチについて命名はしていないが、「縦割りホームルーム制という教育実践が、実際に教育場面でどのように実施されているのか、そこにはどのような教育のねらいがあるのか、さらにはそうしたねらいをより有効に達成するためには、ホームルームの運営をどのように改善していけばよいのかといった、より実践的な問題関心にもとづくアプローチ」(同、388)である。

第3は、荻谷が若狭高等学校の縦割りホームルーム制を分析した教育社会学的アプローチである。その特徴は4点にある。第1点は、「ホーム制に対し、賛成でも反対でもない、『第三者』的な立場か

---

\* 東海学園大学教育学部教授・学部長

ら検討する」点である。第 2 は、ホーム制を「他のさまざまな教育活動との関連の中で検討する」点である。第 3 は、「ホームルーム制を学校を取り巻く社会との関係の中で捉える」点である。第 4 は、「ホーム制の教育的意味を、高校時代という限定された時間の中だけで評価するのではなく人生（キャリア）というより長期間の中で評価」する点である。

本研究では、第 1 のアプローチに歴史的アプローチを加えた分析方法をとりたい。つまり、縦割りホームルーム制の背後にある教育理念を戦前の特別活動のめざしていた教育理念との対比で特徴づけるという教育哲学的教育史的アプローチをとりたい。

#### 1 - 4 分析資料

若狭高等学校の縦割りホームルーム制は 1994（平成 6）年 3 月に終わり、平成 6 年度からクラス制に移行した。これまでの縦割りホームルーム制の歴史、縦割りホームルーム制が果たした役割や効能、そしてその維持が困難になった状況を記録することが重要であると認識され、「ホーム制資料集編纂委員会」が構成された。その編集委員は藪本金一、木下利夫、岸本三次、鋸屋智、顧問は加福秀行である。顧問の加福秀行は当時武生商業高等学校校長であり、若狭高等学校定時制の教頭経験者である。編集委員は当時の若狭高等学校の教職員である。そして若狭高等学校が創立百周年を迎えた 1997（平成 9）年 10 月に総 583 ページの『「縦割りホームルーム制」の実践』が発行された。ちなみにこの記念誌の題字は岸本三次によるものである。

上述の記念誌は 2 部で構成されている。I 部の第 1 章は、「若狭高校新聞」「生徒会関係資料」「福井新聞」同窓会等からの「要望書」などのホームルーム制の資料である。資料集の最後にはホームルーム制の年表が整理されている。第 2 章は編集委員会の呼びかけで寄稿されたホームルーム制の教育実践に関する論考である。第 3 章は卒業生からのホームルーム制の思い出である。ここには第 1 回卒業生から第 45 回卒業生までの寄稿、縦割りホームルーム制発足当初からのアドバイザー（ホームの指導教員）や新聞記者の寄稿や若狭高校商業科発行の『商業科雑誌』（1952（昭和 27）年発行）からの記事が掲載されている。

第 II 部は縦割りホームルーム制の学術論文である。第 1 章は当時東京大学教育学部助教授であった荻谷剛彦が社会的アプローチから分析した「ホーム制から見た戦後高校教育の展開—理念と実態の相関をめぐって—」である。第 2 章は 2 人の卒業生の多分量の論文である。

本研究における分析資料はここに掲載されている資料、1984 年 7 月 30 日から 8 月 1 日までの訪問調査での資料、及び特別活動の目指す人間像に関する論考である。

#### 1 - 5 本論文の構成

本論文では、2 で若狭高等学校の縦割りホームルーム制について、編成の方法、ホームの組織、ホームの運営、ホーム制の理念のから論じ、3 で縦割りホームルーム制の理念を戦前の＜課外活動＞の理念及び戦後の特別活動が求めた人間像との対比で、その特徴を明らかにする。

## 2 若狭高等学校の縦割りホームルーム制の導入

### 2 - 1 ホーム編成の方法

1950（昭和 50）年の「若狭高校 PTA 便り」（第 3 号）に昭和 49 年度から導入された縦割りホームルーム制について学校側の校長鳥居史郎から父兄に説明がなされている。当時のクラスをみると、普通科、商業科、家庭科、農業科、水産科があった。1 つのホーム編成の組織について「学年のしきたりを撤廃して男女、課程、地域、趣味、成績優劣等が一つのホームに片寄らないようにくまれたものがあります」（鳥居 1950、26）と説明がされている。当時は合計 44 のホームが編成され、1 つのホームは 37 名ないし 38 名である。1 つの事例が示されている。その例によれば、普通科は 1 年（男 4：女

2)、2年(男3:女2)、3年(男6:女1)、商業科1年(男3:女1)、2年(男4:女0)、3年(男2:女0)、家庭科1年(男0:女2)、2年(男0:女2)、3年(男0:女3)、農業科1年(男1:女0)、水産科1年(男2:女0)と農業科と水産科は第一学年だけの生徒なので、合計38名である。

平成になってからは、ホーム分けの作業のノウハウが手順化されている(ホーム制資料収集編纂委員会1997,45)。その手順は、1.各調査(入学試験合格者発表後)、2.ホーム分けプログラム、3.新入生のホーム分けの基本形、4.仮ホームから真ホームへ、5.新入生の合格者招集日での顔見せである。2.ホーム分けプログラムは、①新入生の男子について普通、理数、商業、情報処理と学科毎に35のホームに分けていく。②新入生の女子について普通、理数、情報処理と学科毎に35のホームに分けていく。いずれも、出身中学が重ならないように配慮する。また出身中学校を記入した成績順の表があり、それを参考にされている。3.新入生のホーム分けの基本形は、①男女合計がだされたところで、調査書を配布し、成績における35個のホームの平均点を算出し、バランスをとる。②同姓同名、あるいは同姓が複数の場合、またリーダー性のある生徒が数人いる場合、問題行動の生徒等の場合も、同一校の同一学科、同一性別の生徒の調査書と入れ替える。③全てが、均等・均質になって新入生ホーム分け名簿の下書きをする。

1992(平成4)年の新1年生の場合、各ホームに11名から12名が振り分けられているが、第9ホームの場合、普通科男子4名、理数科男子1名、商業科男子1名、情報処理理科男子0名、男子合計6名、普通科女子3名、理数科女子0名、商業科女子1名、情報処理理科女子1名、女子合計6名となっている(福井県立若狭高等学校1982,16)。

## 2-2 ホームの組織

このホームにはアドバイザーと呼ばれるホームを指導する教員がいる。このホームの性格として次のように述べている(鳥居1950,27)。

「そのホームを指導して下さるアドバイザー(ホーム指導の先生)を家長として、上級生は兄姉の情を以て下級生を導き下級生は弟妹の心を以てこれに和し、各課程各地域のものがその独自の性格を以て集って、ホームを楽しみ家庭的な雰囲気をともし、又社会的訓練活動の場とするものであります。」

当時のホームは1つの理想郷としての家庭的な家が想定されていることが表現されている。新教育時代にイギリスではじまって、ドイツや他の国に広まった海辺や山の中で寝起きを共にして過ごす田園寄宿舎学校と類似した性格である。しかしながら、この高校を卒業した調査委員のメンバーの一人はアメリカの1920年代の市民教育に関連していると述べている。若狭高等学校第27回卒業生の山田千明の研究によると、平安女学院の当時の学院長であった岡島松太郎からかりて読んだ「アメリカ合衆国マサチューセッツ州中等学校長会の記録」であったという(山田1997,560)。鳥居は中央講習会の研修会で、ホームルーム方式のパーティカル(タテ割り)プランに出会ったとある。このプランを思い出す契機になったのは、鳥居のつい1年前までは中学校ではつらつとしていた生徒が普通科に入学し、大勢の男子生徒の中でわずか2人の女生徒が小さくなっている姿を見て、「学校は、のびのびとすこやかに勉学に励むところだ」(同)と考え、ホームルーム制を導入したとされている。

## 2-3 ホームの運営

ホームの運営については、「福井県立若狭高等学校総務委員会規約」で決められている。

1973(昭和48)年の「若狭高等学校総務委員会生活指導部」の作成した規約では、第4章でホーム運営は「ホームルームアドバイザーの指導を得て、生徒間で選ばれた各委員のプログラムに従って自主

的にホームタイムを活用し運営する」(若狭高等学校総務委員会生徒指導部 1973、35)とある。この規定では、ホームは生徒の自主的運営に任されていることに特徴がある。しかもその自主性は生徒の自主的なプログラムを作成する計画性を前提としている。ここにある「ホームルームアドバイザーの指導を得て」は、次のようにその任務が総務委員会規約によって制限されている(同)。

「アドバイザーは親愛の情を精神的支柱として、ホームルームを指導の場として生徒と昼食を共にしながら大要次のような任務を果たす。

そしてカウンセラーの役目を果たす。

- (イ) 学校管理に関するもの
- (ロ) 個人指導に関するもの
- (ハ) 集団指導に関するもの」

上述の規約に「ホームタイムを活用し運営する」とあるが、ホームタイムは毎日35分の昼食時のショート・タイムと毎週一回一時間(水曜日第4限)のロング・タイムがある。ショート・タイムでは、「出欠の点検、健康観察に重点を置き、談笑の中に個人指導をする」、「自治活動として放送部による放送プログラムを聴取する」(同)ことになっている。ちなみに、この高等学校の卒業生の一人への調査では、当時授業は自主選択であり、出欠はショート・ホームであったので、それぞれは午前中は授業を受けるクラスへ行き、昼食時にホームに集まり、そして再び午後は授業を受けるためにクラスへ移動していったと述べていた(1984年7月の調査)。出欠が昼食時になされるので、そこだけに出席すれば、授業に欠席しても出席になるので、生徒の自主性を重んじたシステムである。

ホームの諸行事は次のように1980年代には定例化されてきている。これまでの経験が蓄積され、主な行事としてホームルーム独自の運営計画による行事は、「新入生歓迎葉書の発送、新入生歓迎会、遠足(春秋2回)、ホームキャンプ、ホーム予餞会、ホーム雑誌の発行、その他」(若狭高等学校総務委員会生徒指導部 1973、35)となっている。訪問調査でホームキャンプについて、キャンプ場での場所争いはないのかと質問したところ、各ホームが代々で選定してきた場所があり、それが各ホームのキャンプ設営地になるので、ほとんど場所争いになることはないという回答を得た(1984年7月の調査)。

これらのホームルーム独自の行事と平行して、生徒会の運営計画による行事には「球技大会、音楽コンクール大会、体育大会、学校祭、討論会、学校予餞会、リーダー研修会」(同)がある。

ホームの運営例を挙げると1990(平成2)年度の次の22ホームの例がある。22ホームは、若狭高等学校の教育目標を「教養豊かな社会人」に置き、縦割りホームルーム制の理念を、1)異質なものの理解と寛容、2)主体的な生き方を育てる、3)ひとりひとりの個性を育てる、4)生き生きとした学校づくり、としている。そして、次の4つの22ホームの基本目標を設定している(ホーム制資料収集編纂委員会 1997、49)。

- (1) 自己本位にならず、他人の立場に立てる人間になろう。
- (2) 学校は自己鍛錬の場。いやな事、苦手な事にも挑戦しよう。
- (3) 自分の言動に責任を持ち、活動に積極的に参加協力しよう。
- (4) 自分の意見をはっきり主張するとともに、他人の意見もしっかり聞こう。

この基本目標をさらに、日常生活、行事、学習、生活の場の具体的な目標にまで10項目の例を示している。

ホームの基本目標の(1)は、縦割りホームルーム制の理念の1)異質なものの理解と寛容を具体化したものである。ホームの基本目標の(2)(3)は、「主体的な生き方を育てる」と「生き生きとした学校づくり」という縦割りホームルーム制の理念を具体化したものである。そして、ホームの基本

目標の(4)は、という縦割りホームルーム制の理念の1つである「ひとりひとりの個性を育てる」を生徒自身の言葉で表現したものになっている。

図1は、ホーム22のホーム活動の1年の行事計画である。ホーム独自の活動計画としては、4月9日の「ホーム歓迎会」、5月8日の「遠足」、7月21日から26日までの「ホームキャンプ」、10月8日の「競争大会」、10月17日の「ホーム活動の日」、2月14日に「ホーム討論会」が計画されている。全学企画で競争が伴う場合、例えば9月29日と30日の「学校祭」では昨年の順位(9位)が計画に記載されている。

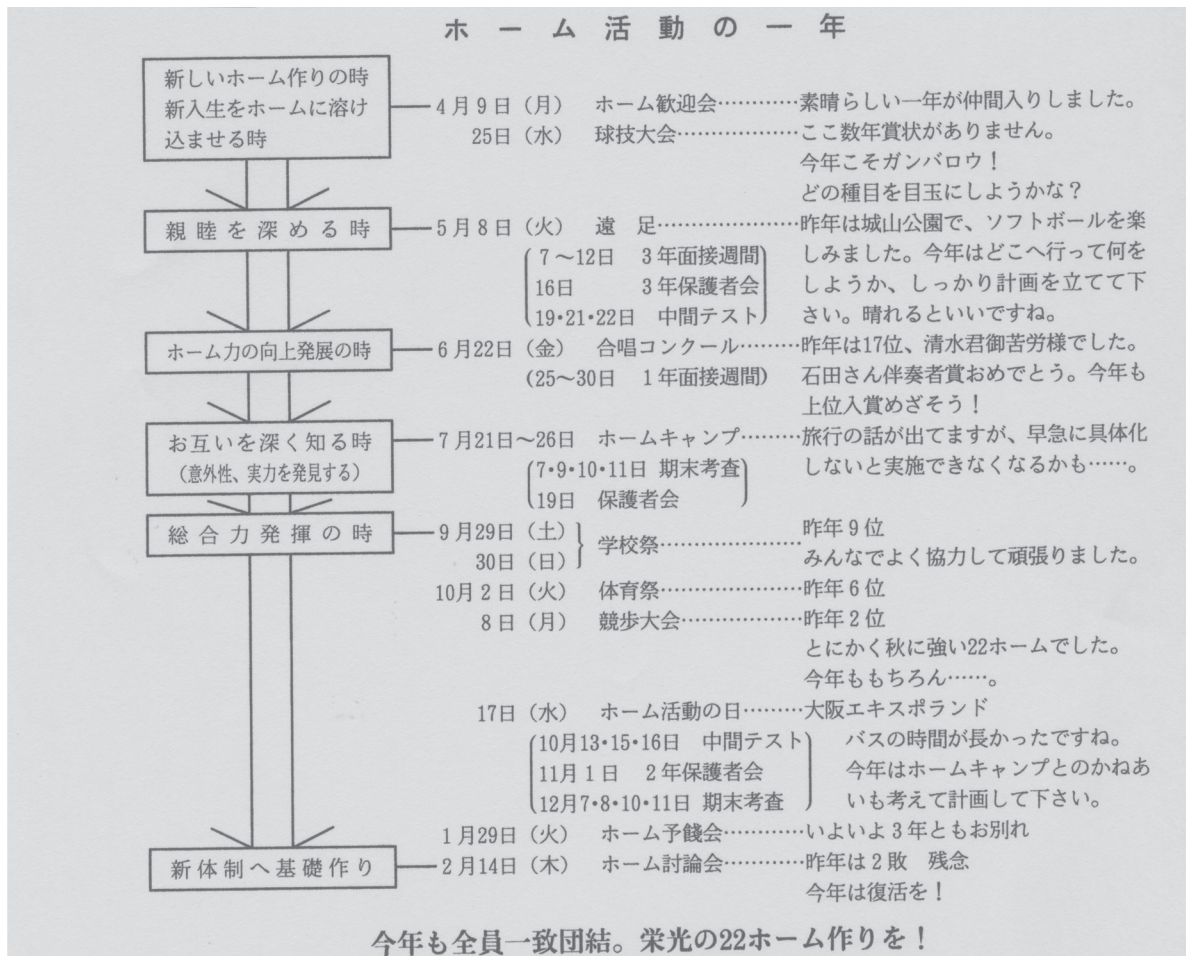


図1 22HRのホーム活動の計画

## 2-4 縦割りホームルーム制の理念

1952(昭和27)年3月に若狭高等学校を卒業した生徒(第3回卒業生)が当時の高校生活を振り返って寄稿した次の文章に、ホームルーム制の特徴が表れている(宇佐見 1997, 309)。

「教育には門外漢ですが二つの面があると思います。一つは知識を授け高めるという面であり、一つは人格的な向上、人間教育とでももうすべき面であります。朝日新聞で若狭高等学校のホームルーム制が紹介され注目されたのは、クラス制とホームルーム制の併用という仕組みが、知識教育と人間教育のバランスを自ずととれてくる絶妙なシステムであり、しかもその運用が長い伝統の積み重ねにより磨きがかかってきていたからです。私にとって、この

ホームルーム活動から受けた人間教育が実社会に出て非常に役に立ったのです。学年も違いまた普通科、商業科、家庭科と科も違う男女入り混じったホームルーム仲間を、同じ方向にまとめていくうちに協調性と指導力を知らず知らずのうちに体得できたということがあります。」(宇佐見 1997、309)

宇佐見氏は高校時代に知識教育と人間教育がなされたと体得的に感じている。教科を学習するのはクラスであり、人間について学習するのはホームでの活動である。そして「このホームルーム活動から受けた人間教育が実社会に出て非常に役に立った」と述べている。若狭高等学校の教育目標と縦割りホームルームの理念を一言で表現するならば、前者は、「教養豊かな社会人」である、後者は、「異質なものへの理解と寛容」である。学校側が理解している「教養豊かな社会人」と「異質なものへの理解と寛容」をみることにしたい。

#### (1) 教養豊かな社会人

教養豊かな社会人という言葉は1949(昭和24)年7月18日に発行された「若狭高校新聞」第1号には見られないが、当時の校長であった中野定雄は「単位制度、ホームルーム制度等は最新の教育理論に基づいた、世界に於ける最も進歩的な制度」(中野 1949、24)であると自覚されている。この中野定雄校長は、1951(昭和26)年12月15日発行の「若狭高校新聞」において「教養人とは」と題して教養人についての論説を試みている。彼は、「教養人とは人が本具する心身両面の諸能力を教育及び自己の努力によって高度に発達させた人であると定義し得ると思う」(同 28)と述べている。そして、心身両面の諸能力の発達の側面として、知性、感受性、社会のために行動する人間、勤労の点から次のように教養人を特色づけている(中野 1951)。

中野は知性については、人間界と自然界の事象に対する興味と真理を究める意思を強調している。そして高校生に対して、次のように読書と思索を求めている(同 28)。

「先ず第一に、高い知性を備えていることが必要である。自然界人間界のすべての事象に対して、常に深い興味をもち、それらを正しく理解すべく普段に努力し、それによって知能は錬磨させられ事物の窮境に到達せんとする強い意志をもっていなければならぬ。従って普段の読書思索研磨が教養人の重要な特徴である。」

次に中野が教養人としての資質として求めるのは森羅万象に対するはつらつとした感受性である。それも冷たい感受性ではなく、温かく感じ取る感受性を強調して、次のように述べている(同)。

「それと同時にそれと関連して人間界自然界の凡ての事象に対して新鮮にしてはつらつとした感受性をもたねばならない。自然の美、あるいは人間のもろもろの営みによって心動かされ、それを温かく感じ取ることができないとすれば教養人たるの資格に於いて多に欠ける所があるとせねばならぬ。」

戦後直後の民主社会を形成することが強調された状況の中で、中野の提言の中で最も興味深いのは社会参画の精神、問題解決の精神としての人間生活をよりよくする為に不断に働くことを強調していることである。彼はそのことについて次のように述べている(同)。

「かくなるものを求め、崇高なものに憧れる精神はまた自らが行動的でなければならぬ。健全な精神は自ら人間健立の方向にむかってうごかずにはおられない、読書めい想に耽り、白

眼で世を睨み、自ら清高を以て任ずるなどは決して健全なる人間生活の姿ではない。(中略)。即ち自己を完成し、人間生活をよりよくする為に不断に働くことが真に教養ある人の本領であって、それなくしては生き甲斐ありと感じ得ないのである。」

そして最後に中野が教養人の特色として掲げるのが勤労である。勤労は人生であると次のように述べる(同)。

「遊んでいるのが快であり、即ち善である。故に財を有するものは働く要はない。かかる一般の勤労観では人間は決して救われない。勤労のない所に、真の意味の人間生活はない、勤労即ち人生であるとの諦観、これが教養人の一大特色であると私は考える。」

この特色に加えて、教養人の資格として、健全な身体ないし肉体の完全な発達と「感性的物質的欲望の支配からの解放」を挙げている。

学校の教育目標に「教養豊かな社会人」とあり、「学問を愛する人間」「情操豊かな人間」「健康明朗な人間」と人間のあるべき姿が示していることと「知性」、「感受性」、「社会のために行動する人間」、「勤労」は対応している。

## (2) 縦割りホームルーム制の理念

1949(昭和24)年の「若狭高校新聞」第1号に鳥居史郎による「縦割りホームルームについて」(I)に、ホームルームが導入された趣旨が説明されている。そこでは、鳥居達の求める社会と育てるべき高校生の関係について、「我々の住む社会が幸福で平和であるためには、教養と高い正しい判断力をもった青年の躍動した生活活動が必要である。」(鳥居 1949、24)と述べている。この意味で当時の教育において最も問題視されているのが、生徒の社会的自治訓点としつけの問題であるとし、この2つの問題の生活指導として取り上げられたのが、「理想的な学年のわくを解いた男女混合のホームであって、アドバイザーの先生を中心に兄弟姉妹の集った楽しい家庭教室である」(同)と説明している。さらにホームルームの理念への理解を願って、鳥居は「若狭高校新聞」第3号に、これからの教育において生徒指導を教科を通してしなければならないが、それだけでは生徒たちの教養の豊かさは求められないし、生徒の社会的公的資質の向上の場ともなり得る組織としてホームルームを設定したと説明している。そして、ホームルームの性格を「教養豊かな知識人を作ろうと努め又自らなろうと努力する先生と生徒との結び合いからなり家庭的な集い」(鳥居 1950、26)と表現している。

若狭高校のホームルーム制の目指した「異質なものに対する理解と寛容」の理念を示しているのは、1965(昭和40)年に発行された『若狭高校研究雑誌V』に掲載された鳥居史郎校長の巻頭言「異質に対する理解と寛容について」である。鳥居氏のこの巻頭言を読むと、深い戦争体験にねざしていることを感じる。戦争を引き起こした社会的条件ではなく、人間の本性についての理解から異質に対する理解と寛容が語られている。そのことは最初の書き出し「人間というものは、動物と同じく、自分に都合のよいものだけを自分の周囲に集めて、異質のものをつとめて避けようとする。」(鳥居 1965、31)という文章にあらわれている。異質なものへ忌避、すなわち、人間は自分とかわりがないものを敵視して、それを陥れようとする習性をもっているという人間理解である。それとは反対に戦争や争いのない世界を創造することと異質なものへの理解と寛容が必要であると次のように述べている(同)。

「人の世の幸せ、人類の最高の目的は、争いのない世界をつくることだと思う。これこそ、神に似せられて人間が創られたという、人類にのみ与えられた特権ではないだろうか。同質のものが助け合ったところでそれは当たり前のものであって、動物でも出来ることである。人類に平和の確立、或いは共存の成立ということは、異質のものへの理解と寛容があってこそ出来るのである。教養ということばの意味を、このことにあると思う。」

ここでは、争いのない世界をつくるということと異質なものへの理解と寛容が関連づけられていることが分かる。それでは、高校生はどのように異質を理解していたのであろうか。1990（平成2）年の32HRの運営方針には次のように「異質なものに対する理解と寛容の精神を培う」として6点を挙げている（ホーム制資料収集編纂委員会1997、50）。

「異質に対する理解と寛容の精神を培う」

年令の異質― 1年から3年まで

課程の異質― 普通科・理数科・商業科・情報処理科

能力の異質― 成績の良い者、良くない者

地域の異質― 様々な地域・中学校出身者

男女の異質― 男女半ずつ

若狭高等学校普通科に1969年に入学し、1972年に卒業した23回卒業生（27HR）の三宅弘は1992（平成4）に講演した記録が「若狭高校商業雑誌」に記載されている。そこでは、ホーム制というのは、今から思うと、太平洋戦争に負けた日本が新しい憲法を作って、日本中が民主主義を学ぶという中で再出発を図ったときの、戦後の民主教育の高い理想のもとで生まれた、と私は、思う。」（三宅1992、167）と述べている。そこでは「社会は性別、年齢、職業、能力、民族など『異質』なもの集まり」（同）として理解されている。この表現は「若狭高校の新聞」第1号で述べられたことと同じである。

### 3 縦割りホームルーム制の理念の検討

#### 3-1 戦前の<課外活動>の理念との比較

##### (1) 明治学制の教育理念

明治5年8月3日の「学制」によって日本の学校制度が整備された。明治5年12月3日をもって明治6年1月1日と太陰暦から太陽暦に改暦されたので、西暦では1872年9月5日のことである。宮坂朋幸は、「学制」について、発令後、40回以上の追加や修正がなされずさんな法令であったと評価するとともに、1873年3月15日に発行された『ニューヨーク・タイムズ』を参考に日本だけでなくモンゴリアン人種にとって「世紀の偉業の1つ」であったと見られていたことを紹介している（宮坂2014、66）。海後宗臣と仲新によると「学制」の前日明治5年8月2日付でだされた前文は「學事獎勵ニ關スル被仰出書」（學制序文）（太政官布告第二百十四號）とよばれていて、学制発布の趣旨を全国民に宣言したものとされている（海後、仲1963、27）。この被仰出書では、「学校は国民各自の立身治産昌業のためであり、『学問は身を立るの財本』であると説き、（中略）今後は『一般の人民』はすべて学校に修学し、『必ず邑（いふ、むら）に不学の戸なく家に不学の人ならしめん事を期（き）す』と述べられている」（同28）。そしてその意味を「華士族農工商の差別なく、また男女の別なく教育を受けるとい近代教育の基本理念がここではじめて明らかにされた」と評価している（同）。

「学制」は学区、学校種、学年、教科など学校制度に関する包括的な規程である。その教育理念は生馬寛信によると次の6点が重要である（生馬1993、100）。

- ①知識主義、特に西洋的な知識主義と実学の理念、
- ②個人主義の教育理念、
- ③功利主義の教育理念、
- ④国民皆就学の理念、
- ⑤教育による国民再編成と国民統一をめざす教育理念、
- ⑥新時代の指導的人材創出の理念。



## (2) 明治期の課外活動の理念

現在「特別活動」と呼ばれる教育活動は、明治、大正、昭和初期の日本の近代学校では、一般に「課外活動」と呼ばれていた(小口1980)。山口満は明治期の教育の目的として、「科学的知識、技能を国民に伝達することとともに、天皇制国家の『臣民』にふさわしい心情や態度、価値意識や行動様式を国民に育てることを基本目的としていた」(山口2014、26)と捉える。そして近代日本の学校教育における課外活動の目的として次のように述べている(同)。

「儀式、運動会、学芸会、自治的活動等、一般に『課外活動』の名でよばれていた教科外の諸活動もまた教科指導の領域とともに上述の目的、とりわけ後者の目的の達成に奉仕する活動として早い時期から学校の教育活動の中へと取り入れられていった。」

山本信良は、1904(明治37)年に出版された『小学校事彙』における「学歴」の「学校に於ける行事は、児童と直接に教授管理することの外に於て、各種の儀式、作業、事務等極めて雑多なもの」(山本1999、80)の解説を引用して、当時の学校行事の領域は教科以外の活動等の全体であったと推測している。そして、1907(明治40)年出版の横山徳次郎『小学教科以外教材及教法』と1991(明治44)年出版の羽山好作『小学校に於ける科外教育の理論及実際』を分析し、1907(明治40)年前後に学校行事を中心とした教育領域の意義が認められたこと、そして名称は「科外教材」「科外教育」と呼ばれ、内容的には現在の特別活動よりも多くの活動を含んでいたことを明らかにしている(山本1999、81)。

小学校天皇制イデオロギーの視点から明治期の学校行事の成立と展開を考察した山本信良と今野敏彦の研究(山本、今野1987)において、近代日本の政府が目指した天皇を中心とした政治体制が学校教育にも影響し、その方針が特に学校行事に色濃く反映したことが実証されている。この研究は、明治期の学校行事を次の視点から分析し、当時の学校行事の特色を描いている。

第1は、児童の自主的活動の視点である。小学校に限定すると「明治期学校行事には、児童・生徒の自主的・自治的活動の入る余地とてなかった」(同32)と結論づけている。

第2は、当時の教育全体が捉えられていた教授・訓育・管理の視点である。訓育としては、「学校行事は、『訓育の機会』としての教育的意義をもっていた」(同)、つまり、児童・生徒に良い習慣や感情を教育する生活の場として考えられていた。教授と訓育の関係としては、学校行事は、例えば「遠足は、身体の鍛錬を主目的とするが、そこにおいて理科、歴史の実物教授の面」(同34)があるように相互依存関係として理解されている。学校行事の管理の側面として、山本は飯島利人の研究に言及し、次の3点をあげている(同34)。

「(i) 善良なる校風を発達させうること、(ii) 家庭と親密に連絡を保持できること、(iii) 児童一般の風潮を観察する好機であること」

この教授・訓育・管理の統合目的として、次のように述べている(同35)。

「その統合目的こそが、森有礼を初めとする時の権力イデオログたちの統合論にみられるものである。つまり、『我国に在て機軸となるべきは独り皇室あるのみ』という考えに正確に対応できる忠君=愛国、天皇=国家という価値観をもつ臣民形成が、統合目的なのである。」

### 3 - 2 戦後の特別活動の人間像

学校教育の展開を小学校教則、小学校令および学習指導要領の分析をとおして明らかにした水原克敏の研究（水原 2010）は、学習指導要領を国民形成の設計書として捉え、それぞれにおける能力観と人間像を解明しようとしている。1951年に小学校では自由研究を変更して「教科以外の活動」が設定された。この活動を通して「学校組織・運営への参加による自治能力、意見の発表能力、学校問題を解決する能力、企画力・協同性、奉仕の精神、健康な体力増進、有効な時間の活用能力そして芸術への鑑賞能力など新しい時代への社会的資質形成が目的とされた」（水原 2010、106）と当時の「教科以外の活動」を国民形成の能力として位置づけている。

### 3 - 3 縦割りホームルーム制の理念との対比

これまでの記述をもとに、縦割りホームルーム制の理念と戦前の特別活動の理念を対比して検討すると、「教養人としての人間形成の場」対「訓育の機会としての教育の場」という共通の機能を持ちながらも、「異質なものへの理解と寛容」対「忠君＝愛国、天皇＝国家という価値観をもつ臣民統合」という理念の違い、「生徒による自主活動」対「児童・生徒の自主的・自治的活動の入る余地とてなかった」と特徴づけることができる。

戦後直後では、水原が述べるように「学校組織・運営への参加による自治能力、意見の発表能力、学校問題を解決する能力、企画力・協同性、奉仕の精神、健康な体力増進、有効な時間の活用能力そして芸術への鑑賞能力など新しい時代への社会的資質形成が目的とされた」とあるように、民主主義を形成するに必要な能力形成が目的とされている。若狭高等学校の縦割りホームルーム制におけるホームとして人間形成を、クラスでアカデミックな教科の学習を通しての学問的能力形成を通して、教養人を育成しようとしてきた。

## 4 結論と残された課題

これまでの記述の結論を整理すると、次のようである。

- 1) 若狭高等学校の縦割りホームルーム制の導入は、普通科に入学した一人の女子学生の様子を契機に、「学校は、のびのびとすこやかに勉学に励むところだ」と考えた鳥居が、アメリカのパーティカルなホームルーム方式をもとに導入した。
- 2) 若狭高等学校の初期に設定された教育目標である「教養豊かな社会人」は心身両面の諸能力の発達をめざし、知性、感受性、社会のために行動する人間、勤労の観点から説明されている。この教育目標が廃止されるまでの45年間の社会的状況とくに教育状況の変化に対応し変化していたのかの分析は本論文ではされてこなかった。荻谷が組織した研究グループによってその成果がだされている（荻谷 1997）。
- 3) 若狭高等学校の縦割りホームルーム制を支えた理念は「異質なものへの理解と寛容」である。その理念は戦争のない平和な民主的社会を形成するという志を有し、地域、学力、性別、進路など新制高等学校が当時抱えていた現実的な異質なものを実践的にしかも自主的に解決する指針であった。ホームはその実践の場であった。しかしながら課題が残されている。45年間、展開がされた若狭高等学校の縦割りホームルーム制を分析するためには、この展開の質的な展開区分にもとづく時期区分が前提となる。田中葉は1949年度から1953年度までを第1期、1954年度から1958年度までを第2期として廃止されるまでを6期に区分し、それぞれの特徴を主に「若狭高校新聞」の分析を通して明らかにしている。理念の理解は変化するものである。この時期区分を通して理念の変化を丁寧分析することが残された課題である。

- 4) 縦割りホームルーム制の理念と戦前の特別活動の理念を対比して「教養人としての人間形成の場」対「訓育の機会としての教育の場」という共通の機能を持ちながらも、「異質なものへの理解と寛容」対「忠君＝愛国、天皇＝国家という価値観をもつ臣民統合」という理念の違い、「生徒による自主活動」対「児童・生徒の自主的・自治的活動の入る余地とてなかった」と相互に特徴づけた。しかしながら、このような図式的な対比では、どのようにしてその対比を乗り越えて新しい理念を実現しようとしてきたか、社会的、政治的、教育的状況と関連させた動的な分析はなされていない。その分析が残された課題である。
- 5) 本論文では、若狭高等学校の縦割りホームルーム制に限定してきた。宮坂哲文の研究によると、ホームルーム制を実施していた学校は46校あるといわれている（宮坂1951、山田1997、552）。また、小学校や保育所でも縦割りのホームルームが限定的に実施されていた（山田1997）。このような実態との比較も残された課題である。
- 6) 収集した資料の中には、当時の生徒にアンケート調査をしたもの（福井県立若狭高等学校1982）や、当時の縦割りホームルーム制についての感想がある（ホーム制資料収集編纂委員会1997）。生徒側からの縦割りホームルーム制に対する評価の分析が必要である。荒川英央は当時の生徒の思い出の記述を基礎に、ホームの変化を丹念に分析している（荒川1997）。アンケート調査や振り返りの記述を資料にした分析方法の解明が残された課題である。

## 参考文献

1. 荒川英央（1997）「ホームのなかのクラス、クラスのなかのホーム」ホーム制資料収集編纂委員会、pp.402-424.
2. 生馬寛信（1993）「第7章 近代教育法制の成立と展開」三好信浩編『教職科学講座 第2巻 日本教育史』福村出版、pp.99-117.
3. 宇佐見信（1997）「ホームルームの思い出」ホーム制資料収集編纂委員会『「縦割りホームルーム制」の実践』福井県立若狭高等学校、pp.309-310.
4. 大野木裕明（1984）「縦割りプランによるホームルーム制」『教育評価展望』2. Pp.60-66.
5. 海後宗臣、仲新（1963）『教科書にみる日本の教育100年』東京書籍。
6. 宇留田敬一（1981）『特別活動論』（教育学大全集 32）第一法規。
7. 苅谷剛彦（1997）「問題の設定：縦割りホームルーム制とは何であったのか」ホーム制資料収集編纂委員会『「縦割りホームルーム制」の実践』福井県立若狭高等学校、pp. 387-402.
8. 小口正行（1980）「明治期の長野県における学校体育－4－課外活動をめぐって」『信州大学教育学部紀要』42, pp.64-74.
9. 鳥居史郎（1949）「ホームルームについて」『若狭高校新聞』（第1号）、1949年7月18日発行、ホーム制資料収集編纂委員会（1997）『「縦割りホームルーム制」の実践』福井県立若狭高等学校、pp. 24-25.
10. 鳥居史郎（1950）『「縦割りホームルームについて」（Ⅱ）」『若狭高校PTA便り』（第3号）、ホーム制資料収集編纂委員会（1997）『「縦割りホームルーム制」の実践』福井県立若狭高等学校、pp. 25-27.
11. 鳥居史郎（1965）「巻頭言」『若狭高校研究雑誌V』（ホーム制資料収集編纂委員会（1997）『「縦割りホームルーム制」の実践』福井県立若狭高等学校、pp. 31-32.
12. 中野定雄（1949）「中野校長生命—絶えず研究工夫せよ—」『若狭高校新聞』（第1号）、1949年7月18日発行、ホーム制資料収集編纂委員会（1997）『「縦割りホームルーム制」の実践』福井県立若狭高等学校、pp. 24.
13. 中野定雄（1951）「中野校長生命—絶えず研究工夫せよ—」『若狭高校新聞』（第22号）、1951年12

- 月 15 日発行, ホーム制資料収集編纂委員会 (1997) 『「縦割りホームルーム制」の実践』 福井県立若狭高等学校, pp. 27-29.
14. ホーム制資料収集編纂委員会 (1997) 『「縦割りホームルーム制」の実践』 福井県立若狭高等学校。
  15. 久田敏彦 (2009) 「第 4 章 授業づくりと授業研究」日本教育方法学会編『日本の授業研究』(下巻), 学文社, pp.107-116.
  16. 福井県立若狭高等学校 (1982) 『総合縦割編成によるホームルームを中心とした生徒指導』昭和 56・57 年度文部省指定研究校研究報告。
  17. 宮坂哲文 (1951) 『ホームルームの実態調査』野間教育研究所紀要, 5, 講談社。
  18. 宮坂朋幸 (2014) 「近代化の中の教育 (1870 ~ 1900 年)」山田恵吾編『日本の教育文化史を学ぶ』ミネルヴァ書房, pp.63-91.
  19. 水原克敏 (2010) 『学習指導要領は国民形成の設計書 その能力観と人間像の歴史の変遷』東北大学出版会。
  20. 山口満 (2014) 「第 2 章 特別活動の歴史の変遷」山口満, 安井一郎 編『改訂新版 特別活動と人間形成』学文社, pp.26-48.
  21. 山田千明 (1997) 「Learning to Live with Others の視点から」ホーム制資料収集編纂委員会 (1997) 『「縦割りホームルーム制」の実践』 福井県立若狭高等学校, pp. 544-580.
  22. 山本信良・今野敏彦 (1973) 『近代教育の天皇制イデオロギー - 明治期学校行事の考察』新泉社。
  23. 山本信良・今野敏彦(1987)『新装 近代教育の天皇制イデオロギー —明治期学校行事の考察』新泉社。
  24. 山本信良・今野敏彦(1986)『大正・昭和教育の天皇制イデオロギー〔I〕 学校行事の宗教的性格』新泉社。
  25. 山本信良・今野敏彦 (1986) 『大正・昭和教育の天皇制イデオロギー〔II〕 学校行事の軍事的・擬似自治的性格』新泉社。
  26. 若狭高等学校総務委員会生徒指導部 (1973) 「福井県立若狭高等学校総務委員会規約」ホーム制資料収集編纂委員会 (1997) 『「縦割りホームルーム制」の実践』 福井県立若狭高等学校, pp. 33-40.